（博士学位請求論文）

中世後期のカスティーリャ＝グラナダ間における戦争と平和

― 「境域（frontera）」からみる異教徒間交渉の実像―

論文概要書

黒　田　　祐　我

中世の地中海域では、西のラテン・キリスト教世界すなわち西欧世界、東のビザンツ世界、そして南のイスラーム世界という、信仰を異にする文明世界が並存して重なり合うかたちで戦争と平和が複雑に展開された。また、三大啓示宗教としてのキリスト教、ユダヤ教そしてイスラームそれぞれの信徒が、顔をつき合わせて生活する空間でもあり、彼らが互いに行き来するこの地中海域の最西端にイベリア半島が位置していた。半島の南にはイスラームを奉ずるアンダルスすなわちイスラーム・スペインが地歩を占め、かたや北にはキリスト教を奉ずるキリスト教諸国が割拠して、この両者の間で「レコンキスタ」と総称される政治・軍事的な衝突が繰り返される舞台となった。中世イベリア半島で並存するこの二つの文明世界は異なる信仰と文化を保持しつつ、「レコンキスタ」あるいは十字軍や聖戦の名のもとで、宗教的、政治軍事的そして社会的な衝突を繰り広げたことは事実である。しかし同時に両文明世界をまたいで融和と和合が生じたことも否定できない。

この二つの両極端な歴史的事実をどのように整合して理解すべきであるのか。中世スペインの歴史の解釈をめぐってこれまで多くの議論がなされ、それは今なお継続している。彼らの評価の差異を敢えて単純化するとすれば、各々の信仰あるいは社会構造の絶対的な相違を重視し、文明世界間の不可避な対立と軋轢を重視する見解（不寛容の強調）、あるいは逆に、上記の相違を越えた形で展開されていく文明世界間の融合を強調する主張（寛容の強調）へと二分することができよう。しかし、このような「寛容かあるいは不寛容か」という二者択一的な歴史像は、当時のイベリア半島ひいては地中海域のダイナミズムを的確に表現しているといえるのか。もし的確ではないとすれば、異なる文明世界が接触する場に成立する社会は、どのような姿をみせていくのか。そこでは信仰の相違がどのような影響をもたらすのか。これらの素朴な問いが、本論文を執筆するにあたっての出発点となった。

上記の問いに実証的なかたちで答えるために、本論文は大きくわけて三部構成をとった。**序論「『レコンキスタ』の歴史から『境域』史へ」**では、中世カスティーリャ王国史に対象を限定し、同王国の「国是」をなした「レコンキスタ」概念の変遷と近現代における解釈を整理したうえで、その問題点を明らかにした。

軍事的な征服運動が大きく進展した中世盛期（11 世紀から 13 世紀前半）を対象とする研究が逆説的に宗教的な「寛容」を強調するのに対して、中世後期（13 世紀後半から 15 世紀末）研究では、この時代に他者への「不寛容」が醸成されていったと解釈される。それでは実際にイスラーム世界の最西端を占めるアンダルスと接触する最前線地帯、すなわち「境域(frontera)」でも、このような大枠の図式が適用されるのか。このような問題提起を行なったうえで、史料・研究ともに膨大な蓄積をみせている中世後期のカスティーリャ王国とアンダルス最後の砦としてのナスル朝グラナダ王国との間に横たわる「境域」に関する研究の現況を整理した。

以降の本論は、二部構成をとる。中世後期のカスティーリャ＝グラナダ関係を総合的に分析するために、「中心」と「境域」という二つの重なりつつも異なる視角を用いた。

第一部「中世後期におけるカスティーリャ王国・グラナダ王国間関係(1246-1492)」では、伝統的なカスティーリャ王国政治史と「境域」地域史との接合を試みた。つまりは「境域」情勢に目を配りつつ、その意義を両王国間の関係史という、よりマクロな次元、すなわち両王国の宮廷から構成される「中心」同士の関係分析に生かすことを試みた。両王国間の関係を分析するにあたって、これまでの諸研究にみられてきた「戦争かあるいは平和か」という二者択一的な論議の把握から始め、この上で当時の戦争の実態、平和の実態をそれぞれ分析し、さらに戦争と平和の連関性を検討していった。

なるほど確かに、カスティーリャ王国とナスル朝グラナダ王国との間には休戦協定が頻繁に締結され、それが更新されていた。一見すると両王国間の関係で平和が優位を占めていたように思われる。しかし、この点で第一に指摘すべきは、カスティーリャ王国とグラナダ王国との間に締結されていた休戦協定が、決して安定的な関係を構築するものとなりえなかった点である。それは両王国間関係における平和の優位を単純に象徴するものとはならず、むしろ状況に応じてその都度の両者の熾烈の交渉を経た、「水面下の戦争」に過ぎなかった。この証左として、それぞれの王国を取り巻く状況如何によって休戦期間のみならず、グラナダ王の臣従規定や貢納金徴収、そして交易の条項に大きな変動が生じている。ゆえに、カスティーリャ＝グラナダ「境域」での平和関係は表面的なものに過ぎず、両王国間の、そして両王国を取巻く西欧世界あるいはイスラーム世界のマクロな政治情勢と深く関連しつつ、その中でしぶしぶ選択された結果にすぎなかったと考えられる。両王国間の休戦協定の締結とその更新の水面下で、戦争と平和が密接に連関する形で両王国間関係は成立していた。カスティーリャ王の側は、将来的に戦争行為を再開することを常に念頭に置いていたのである。人員の徴集力、兵站の確保、軍事技術といったあらゆる面における制度の未発達のゆえに、中世における戦争とは長期間にわたって大規模に実施できるものではなかった。また実施できたにせよ、その成功は保証されておらず、ゆえに当時の為政者らは大規模な戦争を慎重に計画していく。カスティーリャ王は状況に応じて臨機応変に対応できるように、なるべく短期間の休戦を望み、また最大限の経済的搾取をグラナダ王に強制することで間接的に疲弊させようと試みる。このように実際の戦争行為と休戦協定の締結とが相反する現象であったとはいえない。

第二に、上記の連関する「戦争と平和」という視角からみた場合、約 250 年間にわたる両王国間の関係はほぼ二分できる。第一期は 1350 年頃までとなる。この時期は「海峡戦争(Batalla del Estrecho)」という国際的な合従連衡の最中、カスティーリャ王もまた対グラナダ関係を重要視していた。王が自ら戦争を率いてグラナダ王を臣従下に取り込もうと試み、11 世紀末からイベリア半島情勢へ幾度にもわたって軍事力を提供し続けてきた海峡対岸のマグリブからの介入に終止符を打った。グラナダ王国が孤立し、トラスタマラ王朝へカスティーリャ王権が交代することで始まる第二期においては、しかしながら逆説的に、カスティーリャ王は国内外で頻発する諸問題に対処せざるをえず、他方のグラナダ王国はムハンマド五世の長期にわたる治世のもとで最盛期を謳歌する。休戦協定の締結状況からみた第二期の最初の約 50 年間（1350-1406）は、連続的な休戦協定の更新で彩られている。しかし 15 世紀初頭から貢納金の徴収が再開されるとともに、捕虜返還義務が付加され始める。それでもなお対グラナダ情勢に専念しえないカスティーリャ諸王は、休戦協定を介したグラナダの漸進的衰退と不安定化を狙いつつ、グラナダへの直接関与、すなわち戦争の

機会を虎視眈々と窺っていく。

このようにグラナダ王国内に疲弊と分断を引き起こすカスティーリャ王のしたたかな政策は、最後の「グラナダ戦争（1482-1492)」においても遺憾なく発揮された。ムハンマド十一世を懐柔し臣従させつつ内乱を引き起こさせ、グラナダ王国の各拠点を「寛容」な協定を通じて個別に勢力下へと併合していく。ゆえに、カスティーリャ王宮廷のとる対アンダルス政策は、中世盛期と中世後期を通じて驚くほど酷似していたとすべきであろう。大規模な戦争行為を実施しえない王権は、11 世紀において「パーリア制」という一種の異宗教間での同盟関係を採ることで、漸進的なターイファ諸王国の衰退を目論み、トレード征服（1085 年）へと結実させることができた。状況は 12 世紀においても、そして「大レコンキスタ」が推進される 13 世紀前半においても同様といえる。アンダルスに対する戦争は、序論で分析したように「西ゴート王国の簒奪者」たるイスラーム勢力に対して正当化された戦争という意味で正戦であり、なおかつ相手が異教徒でもあることから、後に聖戦へと変容していった。しかしこれはアンダルスの政治的な服属、つまりは臣従下に置くことを目標とする現実的なものでもあり、戦争遂行の限界を示しつつ常に一定の「共存」への可能性の扉を同時に開いていく。最終目標をアンダルスの併合に置きつつ、中世盛期から首尾一貫した戦争と「外交」をアンダルスに行使し続けたカスティーリャ王の目標は、あくまでその政治的併合にあった。15 世紀の末に突如として状況が一変するまで、中世を通じて臣従、降伏協定を介したムスリムの残留は、別段大きな問題を引き起こすこともなかった。このような中世スペインの歴史は「寛容か不寛容か」あるいは「戦争か平和か」という単純な二項対立的な図式では把握できないものである点を、いま一度確認した。

しかし第三に、戦争と「外交」手段を駆使することによる「レコンキスタ」の完遂という、首尾一貫したカスティーリャ王権の大義の実現のためには、「境域」の民の介在が不可欠とならざるをえない。グラナダ王国に関する最新情報がいち早くもたらされる「境域」が「外交」交渉に必要な人材を揃え、「境域」の有力者が、王権になりかわって折衝を行ない始めるのは当然の流れといえる。14 世紀後半以降、トラスタマラ系の諸王が「境域」統治に関心を抱かなくなるのに伴い、カスティーリャ王国とグラナダ王国との休戦協定の交渉を実際に担当していくのは、「境域」社会を統べる大貴族層となった。そして「境域」社会が、自身の思惑をもって個別交渉にあたっていくのも必然であった。

中世盛期から首尾一貫した政策をアンダルスに行使し続けようとした「中心」としてのカスティーリャ王権の思惑は、当の「境域」社会で、どのように受容されていくのであろうか。言い換えるならば、「中心」同士で成立した王国間休戦協定の存在にもかかわらず、日常的な越境暴力に晒され、しかしこの侵犯行為を抑止させるために独自のイニシアチヴで対岸と「対話」を欠かすことのなかった「境域」社会は、いかなる動きをみせていくのであろうか。

第二部「『境域』における『戦争と平和』」では、視座を中世後期のカスティーリャ＝グラナダ「境域」自体に定め、よりミクロな次元、すなわち両王国の境界域同士の関係を分析した。地域史研究における二元性論議は形を変えながらも、やはり「戦争かあるいは平和か」で推移してきており、それは「戦争遂行型社会」か、あるいは「平和維持型社会」かという「境域」社会論の対立という形をとっている。まずはこの両社会論がこれまで明

らかにしてきた諸特質を実際の史料を引用して分析しなおし、その上で各々の特質同士の連関性を、越境交渉の個別具体的な事例から指摘していった。

確かに「境域」では越境暴力が日常的に頻発していた。しかし「境域」住民は、王国間休戦協定を維持させ、頻発する越境暴力が負の連鎖を引き起こすことを同時に阻止しようとした。これらの諸特質は常に同時に存在し、かつ連関していたのではないかとの仮説をまず提示した。というのも「境域」における生活は、必然的に巻き込まれざるをえない危険によって、生き残りのため必然的に「寛容」とならざるをえないものであったのではなかろうか。

「境域」は、王国間休戦の履行にもかかわらず、そしてこの休戦状態が長期間にわたって維持されたにもかかわらず、日常的に越境暴力が繰り返される場となった。社会の隅々に至るまでが王国国境域の防備を目的として形成されていった当該地域では、当然ながら常なる防備を担い、必要な際に略奪遠征を実施できる者が支配層を形成していった。しかしこの越境暴力の担い手は、同時にその管理者ともなる。カスティーリャのトラスタマラ王権が「レコンキスタ」に直接関与しなくなる 14 世紀後半以後、日々境の向こう側との駆け引きを経験していた「境域」の大貴族層が、王国間休戦協定の実際の交渉で主導権を発揮していくのも当然の流れといえる。セビーリャをはじめとする大都市、より前線に位置する中小都市の寡頭層を形成する中小貴族層もまた、大貴族の代理として、もしくは自らの主導で、王国間休戦の維持に尽力する。王国間休戦協定をより確固なものとすべく、あるいは協定の不在時の和平を保障するために、「境域」は局地的で小規模な和平協約を取り交わす。彼らは戦争の主役でもあり、また和平の維持者としても活躍する両義的な存在であった。

本論文の第一部で分析したように、カスティーリャ王権は、徹頭徹尾ナスル朝の漸進的な衰退を目論み、最終的に併合することにあった。9 世紀から維持された「レコンキスタ」概念を大義名分とする王権にとって、イベリア半島の一部を不当に領有するナスル朝の永続は決して容認できるものではなかった。しかし 14 世紀の後半にトラスタマラ王朝へ王権が交代した後、「境域」社会は「中心」たる王権から逸脱していった。「中央」同士の折衝で成立する王国間休戦協定、あるいは公的な戦争と並行して、個別に成熟をみせる「境域」社会は、軍事を専らの生業として台頭してきた在地貴族層の主導の下で、独自の和戦をグラナダ側と展開していった。

「境域」社会が独自に展開する「外交」は、休戦にもかかわらず頻発する不法な暴力を解決するために維持せざるをえないものとなる。やはりそれは、決して恒久的な平和を構築することを意図するものではなかった。境を越えて往復された書簡の文言は、しばしば相互の友好を強調するものの、報復をちらつかせて脅迫めいたものといえる。しかし彼らは共通して、休戦関係の全面的な破棄と続く戦争状態から生じてくる危険を恐れて、また略奪の応酬が繰り返されることで被る多大な損害を回避しようとした。彼らは繰り返される交渉の中で、互いに容認しうる諸慣習を共有し、和平を各々の地域的利害を軸に維持しようとする。「境域」民にとって境を接するナスル朝領域とは、「中心」が考えるような征服すべき領土というよりもむしろ、日々の和戦を通じて互いに平衡状態を維持していくべき相手であった。ゆえに「境域」にとっての対グラナダ関係とは、局地的な暴力の応酬を行ない、かつ、この暴力の不必要な連鎖を食い止めることに尽きる。

まとめるならばカスティーリャ＝グラナダ「境域」社会とは、越境して暴力を行使しつつも、これを統制し抑止するための枠組みを備えるため、必然的に宗教の境を越えた「対話」が必要不可欠となる場であった。このような社会では、戦争と平和が分かちがたく結びつき、暴力の優勢と共存の希求とが並存して複合していく。しかしこれらの諸要素が同等の強さで作用を及ぼすために、水面下において大きなダイナミズムを含みつつも約 250 年間にわたる期間、さほど大きな動乱に見舞われることもなく、表面上において静態的な状態を維持することができた。

本論文で扱ってきた中世後期カスティーリャ王国における「中心」と「境域」という二つの分析視角を統合することで明らかとなった結論は以下の通りとなった。それは、「中心」と「境域」とが関連しつつも、前者と後者との間に、ある隔絶が生じていくことである。「中心」と「境域」との乖離が、14 世紀半ばから後半にかけて生じていることは間違いない。「中心」という次元において、「海峡戦争」で勝利を収めたカスティーリャ王は、しかし英仏百年戦争に巻き込まれる形で国内外の状況への対処に忙殺された。その一方でナスル朝グラナダ王は、「海峡戦争」での敗北によって制海権を喪失し、11 世紀から維持されてきたマグリブとの接触を大幅に制限されて、イスラーム世界からの孤立を余儀なくされた。しかし、このような大局的な歴史の動向は、「境域」で別の局面を準備することになった。国内の政治的再編と西欧諸王国との「外交」に忙殺されるカスティーリャ王権は、「境域」情勢へ直接的な関与をしなくなり、ナスル朝君主と休戦協定を更新することで満足した。「海峡戦争」時には、カスティーリャ王国とともに複雑を極める合従連衡の主役を務めたアラゴン連合王国、ポルトガル王国、ジェノヴァや、マグリブ・イフリーキヤのイスラーム諸王朝も、カスティーリャ＝グラナダ「境域」への関与に突如として消極的となる。「国際社会」から忘却されてしまったこの「境域」は、自らの力でもってなんとか和戦を維持しようとする。グラナダは国際的な孤立を深めるばかりか、その君主は自らの「中心」としての求心力を自国内で喪失し、地域単位でもってカスティーリャ側の「境域」とのミクロな交渉を個別に繰り返していかざるをえなくなった。いうなれば、孤立し分断され、忘却された場同士が局地的に折衝を積み重ねていく中で「境域」の住民は、「中心」から逸脱した固有のダイナミズムを内包する社会を形成していった。この社会は和戦の平衡状態をこそ、互いの生存のための条件とした。彼らは互いに相手方を、宗教と文化の相違から生じてくる敵意や憎悪の対象としてではなく、暴力を応酬しつつ、しかし暴力の全面的な連鎖と拡大を互いに食い止めていくべき交渉相手と見なしていた。なぜなら、どちらも孤立した「境域」として「中心」から忘却されてしまった以上、相手方を圧倒しうる宗教的、あるいは世俗的な征服動機も、軍事的な力も持ち合わせていなかったからである。

「境域」社会は、15 世紀の末まで平衡状態を維持しようとしていた。しかし唯一残っていた「中心」たるカスティーリャ王権は、イサベル女王のもとで夫のアラゴン王との共同統治を開始し、最後の懸念であったポルトガル王国との軋轢を解決して国内外の問題を一掃した時、その牙を「境域」に突如として向けた。カスティーリャ王権は「レコンキスタ」の完遂を「国是」として保持し続けていたものの、内外の諸情勢がその全面的な遂行を不可能としていたにすぎない。コンスタンティノープルが陥落し、西欧世界全体の対異教徒認識が徐々に変化していた 15 世紀後半の潮流が、イベリア半島を取り巻く情勢の変化と複

合的に絡み合って、最後の「グラナダ戦争」が開始された。1481 年末に生じたグラナダ側からの休戦協定違反による領域侵犯を好機と捉えたカトリック両王は開戦を決断し、「境域」も否応なくこれに巻き込まれていった。孤立した「境域」で長きにわたって個別に繰り返されてきた和戦は、「中心」の突然の大規模な介入により、その展開の余地を喪失してしまった。 中世後期のイベリア半島の歴史をより大きな視野から再度眺めてみるならば、興味深い事実が浮かび上がってくる。中世後期のラテン・キリスト教世界とは、教皇権、皇帝権の失墜が誰の目にも明らかとなった時代である。楕円的で有機的、かつゆるやかな連合体として中世盛期に確立したラテン・キリスト教世界は、宗教的、世俗的な求心力を失っていった。時期的に差があるとはいえ、この世界を構成する諸王朝とその支配領域は、これらの権威を失った結果、個別の対応を迫られていく。それは英仏百年戦争として、またアヴィニョン教皇権の「失墜」と続く教会大分裂という形で表面化してくる。聖俗の両権威の失墜から再編までには、ちょうど中世後期全体を費やす必要があった。諸王国の再度の安定と教会権威の再興を経た 15 世紀末、再び西欧世界は活気を取り戻し、全西欧的な情勢が展開し始める。この巨視的な動向と、中世イベリア半島の歴史は深く関連しているのではないか。西欧世界は宗教的な権威、世俗的な権力の双方を再編させ、これと軌を一にするかたちでスペインでも新たな「中心」が誕生し、同時にこれは近世の幕開けを意味した。しかし逆の視点から見るならば、中世後期に「中心」が再編に力を注いでいた時期、「境域」には独自の展開を遂げる余地が大きく残されていたとみなすこともできよう。

本論文の結論をまとめるならば第一に、「境域」では「戦争遂行型社会」と「平和維持型社会」という二つの相反する特質が同程度に作用を及ぼし連関しあって、双方の特質の間で均衡がもたらされている社会が形成された。第二に、「境域」は「中心」から逸脱し、自立的な傾向を示す場であったと考えられる。

「境域」は「中心」から逸脱することで再生産されつづけていった。他の地域や時代に生成された辺境域でも、本論文と同様の結論が導かれるのであれば、これまで「中心」からのみ描かれてきた歴史像は、大きく修正されていかなければならないであろう。